

# 高知城見聞記

## 神崎辰雄

(会員 鶴見町大島)

徳島の名所、大歩危<sup>ほほけ</sup>、小歩危<sup>ほほけ</sup>は吉野川が四国山地を横切る横谷部で、ほけとは谷の兩岸が山に迫り、切り立つたがけのことだそうだ。土讃本線<sup>とさなんほんせん</sup>と国道が峡谷とほぼ平行して走り、大歩危駅から北を大歩危、小歩危駅付近を小歩危と言っている。新緑と紅葉の美しいところで、川下りを楽しむ観光客も多いようだ。

ここから私は高知の桂浜へと車を走らせた。土佐湾側の東端の竜頭崎<sup>りゅうとうさき</sup>とその南にある竜王崎にいだかれた一帯ほどの弓形の浜は、太平洋の波をまともに受けて、なんと素晴らしい雄大な眺めだろうと驚いた。毎日、海を眺めて育った「男の港」鶴見生まれの私も、五色のケイ石の美しい砂浜にしばし心をうばわれた。

桂浜の海浜に突き出た台地上には浦戸城がある。天正十九年(一五五〇)から慶長五年(一六〇〇)まで長宗

我部氏の居城であった。今は土塁や空堀にわずかに往時の名残をとどめているだけで、訪れる人も少ない。長宗我部氏は関ヶ原の戦いで西軍にくみして敗北し、主君盛親は京都におびき出されて幽閉されている。

また、桂浜の台地には遠く太平洋を眺めて立つ坂本竜馬像がある。

大政奉還建白を推進し惜しくも見廻組の刺客に暗殺されたが、刀を取る暇もなく、まともに戦えば千葉道場は北辰一刀流の腕前、さぞかし無念であつたらうにと、往時を偲びながら立像に合掌した。この時三十三才であつた。



坂本竜馬

ここから高知城へと車を走らす。城内に入ると右手に山野内一豊の妻像がある。これは昭和三十一年

(一九六四)高知商工会議所婦人部会の企画で、高知県の婦人達が頑張つて造つたものである。

この逞しい馬の銅像を見るたびに人びとは、妻が自分のへそくり黄金十両を与えて、夫を出世させたという話を語り継いでいる。だがこの話には諸説があつて定かではないし、名前も「千代」とか「ます」などと言われてはつきりしないが、夫人の偉さについては幾つかの話が伝えられているので、この話もそうした偉さを象徴したものである。

出世する前の山内家は貧しく、まな板を買わずに一升枘を裏返しにして使用し、家計を助けたといわれ、その枘は家宝として一豊夫妻を祀る藤並神社に納められていたが、戦災で焼失してしまつたという。

これは実話であるが、関ヶ原戦役前夜に石田三成方から来た密書を、夫人は関東にいる夫のもとに封も切らずに届けて、そのまま徳川家康のもとに差し出すように勧めている。

夫人の方があまりにも有名になつてしまい、一豊は夫人の陰に隠れてしまつた感が強いが、彼の戦いぶりや高知城の築城などの経過をみると、戦国武将として凡将で

はなく、すぐれた器量人だつたことが偲ばれる。

山内一豊は天文十四年(一五四五)尾張岩倉城の家老、盛豊の三男に生まれているが、父や兄が戦死して戦国孤児となり、縁故をたよつて転々としている。

羽柴秀吉に仕えて相次ぐ戦役に参加し、元龜元年(一五七〇)信長が越前の朝倉義景を攻撃した時、敵將三段崎勘右衛門と刀根坂で一騎討をして、左眼に矢を射込まれるという重傷でありながら、相手を仕留めるといふ武功をあげている。

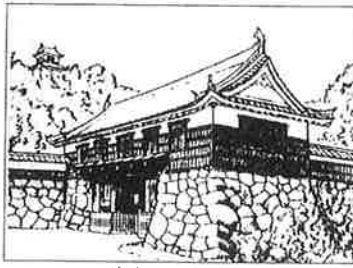
天正元年(一五七三)に四百石、同五年二千石、同十二年五千石、翌年長浜で二万石、同十八年遠江の国掛川で六万石といつた出世ぶりを示している。

このように戦役のたびに抜群の武功を立てていることも、勇猛な武将だつたことがうかがえる。また、馬印には「無」の字を好んで使用したと言われている。

慶長五年七月二十五日、家康は諸將を集めもう一つの関ヶ原とも言うべき重要な会議を開いている。世に言う「小山会議」である。当時、掛川の城主であつた山内一豊は率先して家康のため城の明け渡しを申し出ている。この忠誠を家康は忘れてはいなかつた。

関ヶ原の合戦で、石田三成の西軍に属した長宗我部盛親は土佐を追放され、その後に一豊が土佐二十四万石の太守として、慶長六年正月浦戸城に入城しているが、近世城廓として拡張する余地に乏しいため、この城を放棄して、高知市の中央にある大高坂山に居城を築き始めた。使役者は一日千三百人程で、米七合と味噌代を支給している。

しかし、一豊は高知城の全体の完成を見ることなく、慶長十年（一六〇五）九月二十一日急病のため六十一歳で逝去している。城は二代忠義によって慶長十六年に三の丸まで完成している。



高知城追手門

天守閣をはじめ、十五棟が重要文化財に指定され、高知県のシンボルとして多くの観光客を集めている。以後十五代山内容堂が藩籍を奉還するまで代々の居城であった。

私が素晴らしく思ったのは、この地は洪水の常襲地という悪条件でありながら、これを克服して完成し、また享保十二年（一七二七）の火災で多くの建物を焼失しながらこれも復興し、天守や殿舎（重文）だけでなく、本丸のすべてが完全に残っているということである。また、城壁築造は穴納役、北川豊後の手法によるもので、まさに日本を代表する城である。

余談になるが、京都東山三十六峰の一峰にあたる霊山りょう山には、勤王の志士五百四十九柱を葬った墓所がある。この霊山墓地の中央山腹に竜馬、中岡慎太郎、そして下僕の藤吉が仲良く肩を並べて眠っている。桂小五郎（のちの木戸孝允）が涙をふるって墓標に揮毫したと言われている。

南国土佐はよいところである。夜はホテルで名物の大皿に盛り合わせた皿鉢料理ざわらちが出た。厚切りのカツオのたたきを目の前に、高知の女性は酒が強いとは聞いてはいたが、斗酒尚辞せずの粹な仲居さん方の酌で、下戸の私はただただ平伏するのみであった。